

日本英語教育史学会 会報

302

2021年4月14日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
e-mail: membership@hiset.jp会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第282回研究例会報告

2021 (令和3) 年3月20日 (土), 第282回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は22名でした。

例会では2本の研究発表が行われました。はじめに, 米岡ジュリ氏 (熊本学園大学) が「ローマ字表記争論をめぐって ~過去, 現在, 未来~」というタイトルでお話しされました。続いて上野舞斗氏 (四天王寺大学)・江利川春雄氏 (和歌山大学) による「広島文理科大学『英語教育』(1936~1947)における英語教育論」の発表が行われました。司会は河村和也氏 (県立広島大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は米岡氏, ②は上野氏及び江利川氏の発表への感想, ③は会全体に対する感想です)。

◇ ◇ ◇

◆①ローマ字表記法をめぐる論争の歴史的変遷にかかるご発表でしたが, まずは, ローマ字の定義からおさえないと分析の視点が明確にならないので, この部分の整理から始められるとすっきりとした発表になったかと思われま。ローマ字をめぐるのは, 国語教育史の観点からも, 言語政策史の観点からも, あるいは, 英学史の観点からも, さらに, 質疑でもやりとりのあった日本語音韻史の観点からも取り上げることができますが, やはり紀要への投稿を前提に, 英語教育史のほうに引き寄せた形で論文にまとめ上げていただければと願っております。質疑応答の際に紹介した市河三喜・宮崎静二『羅馬字と英語』(光風館, 昭和6)は, 「本書前半ハ純然タルローマ字教科書デ, 小学校四五年以上ノ児童ノ使用ニアテタモノデアリ, 後半ハ其基礎知識ニヨツテ, 英語ノ単語発音ノ一般概念ヲ与ヘル事ヲ目的トシタモノデ

アル。」(「著者の言葉」)とあるように, ローマ字の知識を英語入門に利用しようとするものですが, ローマ字が英語入門期の指導にいかん利用されたかななども一つの分析視点になろうかと思ひます。(Dragon)

◆①ローマ字表記の混乱は, 私にとっても身近な経験であり, その点を歴史的な観点からご説明いただけたことがとても興味深かったです。新ローマ字表記法は非常に興味深いですが, 日常生活の中に密接に入り込んでいる訓令式やへボン式, あるいはワープロ式にとって代わるには, ある程度の時間はかかるだろうと思ひました。新発音によるローマ字表記が, はるか昔より提唱されていることには驚きました。

(ポレポレ)

◆①構造と語用, etic と emic, 使用 (学習) 者が抱く言語イデオロギー, といった問題の交点に現れる「ローマ字」の姿を垣間見た気がし

ます。近代日本の言語編制という広い枠組みで、英語教育との関連が明らかになることを期待しています。

(Tak)

◆①普段、あまり思いを巡らせることのないトピックについての研究でした。興味深く拝聴し、とても勉強になりました。発表で漢字のことを「悪魔の文字(ことば?)」と述べている人がいたことに興味を覚えました。私の出身大学はイエズス会が母体でした。外国人神父の先生方は、日本人と遜色ないくらいに読み書きができましたが、漢字のことを「布教を妨げるために悪魔が作り出した文字」といつていたことを思い出しました。

(insulae flumen)

◆①ラテン文字(ローマ文字)を用いて自分たちの言語を書き表している人たちは世界中にたくさんいます。わたしたちも日本語をラテン文字を用いて書き表し、この書写体系を「ローマ字」と呼ぶわけです。ローマ字が議論される時にいつも思うことは、ある言語の書写体系をつくる時に特定の他言語に合わせる必要はあるのだろうかということです。今回のご発表でも取り上げられた「ち」の問題ですが、日本語のローマ字では“ti”と綴って「ち」と読むのだという約束ごとを確認すればよいだけではないのかと思っています。英語に合わせて“chi”と綴ることは、英語のことだけを考えれば合理的なのかも知れませんが、例えばイタリア語では“chi”は「キ」と読みます。この不合理をどうすればよいのでしょうか。世界中のすべての言語に合わせてローマ字を考案することには無理がありますから、純粋に日本語の書写体系の問題として議論しなければならないと思います。ただ、ローマ字の指導を英語教育の視点からどのように位置づけるべきかということについては、知恵を寄せ合う必要があるとも思っています。

(riverson)

◆①「誰に向けて説明、使用しているのかを考える(それによって変わる)」という視点にとても共感致しました。学校現場(K-12)では、

国語科、情報科、外国語(英語)科と異なる教員が、同一の生徒に異なるタイプのローマ字を教えているのが現状です。現場の教員は、まさに、1つに絞ると言う視点ではなく、米岡先生の仰るように「場面での使い分け」を教員が理解し、また生徒にその視点を伝えることの重要性を学びました。その視点でいくと、○○式にこだわり過ぎる必要もないのかもしれませんが、もちろん、大学のアカデミアにはしっかりと表記の仕方をレクチャーする必要がありますが、K-12ではどうでしょうか。

(中川健太)

◆②貴重な資料内容を統計的にご説明いただき、さらに内容の要所をお話いただいたことで、複製版にぜひ目を通したくなりました。スライドを拝見する限り、語彙選定に関わる記事も収録されているようで、個人的に大変興味深いです。「昔の資料には現代にも通ずる内容が含まれている」という点は、しばしば聞かれます。ただ、それは現代において内容が進展していないことを意味するのか、それとも過去の時点においておおよそ完成された考え方や主張であったのか、ふと疑問に思うことがあります。

(ポレポレ)

◆②総目次をもとにした量的・質的分析は、日本の「英語教育学」の原型を浮かび上がらせるものでした。今後、英文学などの他分野との協働を通じて、当時の英語学・英文学・英語教育学者たちの「エートス」もぜひ明らかにしたいと思えます。

(Tak)

◆②現在出版されている『英語教育』は、1952年創刊なので、それ以前の英語教育に関する雑誌がこれだけ体系化され、複製されたのはありがたいことです。個人的には「文法教科書の要目及び文法用語の整理」に興味を持ちました。

(insulae flumen)

◆②広島『英語教育』誌を全巻複製されるにあたってこれを通読し、その内容を分析して、そこに読み取れる広島高師・文理大関係者の英語教育論を論じられたもので、同誌の関係巻号

しか読むことのなかった身には大きな一撃を喰らわされたご発表をうかがいました。同誌は9巻1号を以て終刊となったと思いますが、同号には終刊、もしくは休刊の辞はなかったように思いおり、これについて、その後、現在の大修館『英語教育』誌が研究社から創刊されるに際して、広島『英語教育』誌の終刊を確認し、その誌名を使いたいとの問い合わせが広島大学の英語教育研究室のほうにあったということをご披露いたしておきます。(Dragon)

◆②政府が主導する教育政策(英語教育政策)は、現場の指導に大きく影響を与えます。そういう意味では、例えば、4技能という言葉だけが一人歩きしている昨今、歴史を振り返れば何も新しいことではないということなどを歴史から学べる江利川先生、上野先生の発表(出版)は大変有意義な内容でした。また、「木を見て森を見ず」という研究者の視点も、現場の教員には有意義なものでした。英語教育の研究は細分化が進んでおり、細分化されているからこそ素晴らしい研究がたくさんありますが、それを「学校現場(K-12)の指導では使いにくい。」、また、「k-12で教える教員がそのような研究論文を読むかと言えば読まない。」といった、研究と現場指導に乖離があることは勿体ないことで、両者ともに歩み寄りがあることが生徒の視点に立てば必要だという認識を新たにすることができました。(中川健太)

◆③Zoomによる発表が回を重ねていますが、全国どこからでも研究発表が行えるというメリットがあるとは言えるものの、果たしてそれに見合った参加者数となっているかと言うと、残

念ながら、必ずしもそうはなっていないように思われます。本日は会員外の方の参加もあり、海外から参加された方もあったということですが、しからば会員の参加状況はどうかということになり、それなら、人と人とが接してぬくもりの感じられる対面での研究例会が再開され、後の懇親会まで含めて、みんなで楽しめる例会が再開されることの早からんことを願うばかりです。もちろん、コロナ禍収束後についてはハイブリッド形式の例会開催が検討されてよいと考えますが。(Dragon)

◆③オンライン開催の利便性は言うまでもありませんが、やはり通常開催が待ち遠しく感じられます。コロナ禍の収束、あるいはワクチン接種がより進んでいくことを願うばかりです。(ポレポレ)

◆③新型コロナウイルス以前、設備はあったのに、特に、私のように海外で勉強していた者は日本国内の勉強会に参加できる機会に恵まれませんでしたが。私は既に大学院を修了してしまい、その直後に新型コロナウイルスの影響が出たのですが、このように海外からもオンラインならば参加することができます。このような機会を作って頂き本当に感謝しております。これからは現場の教員とアカデミアを如何に融和し、生徒のための英語教育を推進することができるか。その視点で私は英語教育に携わることができればと考えています。研究者でもない、学会の参加者でもない外部の私の参加を認めて頂き、本当にありがとうございました。とても有意義な時間でした。(中川健太)

<発表を終えて>

米岡 ジュリ (熊本学園大学)

2020年3月20日、コロナ過の中 HISELT 初の Zoom 研究会でトップバッターとして発表ができ、光栄です。しかも、普段よりも多くの方の参加があったような気がして、嬉しかったです。

Romaji (romazi, roomazi 他) の歴史を振り返ることで、明治初期から対立してきたヘボン式ローマ字と田中館式ローマ字はそれぞれ繰り返し改善され、論争が繰り返されてきました。かつ、学問的や政治的な影響を受け、現在の制度の二重人格、いや厳密に言えば多重人格的な性質の持つ訓令式 (1954 年) の背景を見ました。質問やコメントをたくさんいただき、特にローマ字と英語教育の歴史的接点や絡み合いをさらに追及する必要があることがわかり、感謝しています。当然ローマ字は英語だけではなく、日本語を含めて様々な言語を学習する道具ですが、基本的に現代日本語を反映する必要があることを改めて確認しました。昔のハヒフヘホのハは唇を合わせたファに近い音であったが、今ははっきりとハとファの違いが発音できるのと同様、音声変化を表すローマ字制度を「50音」に基づくことは無理がある、あるいは固定してきた「50音」自体も現代日本語を表すのに足りなくなっているかもしれません。21世紀に入ってパソコン入力の役割まで負わされたローマ字は、英語教育が小学校3年生から行う今日こそ、再考しなければなりません。昔の貴重な論争を尊重し、今日に合わせる調整を行う時期にきていると考えています。

<発表を終えて>

上野 舞斗 (四天王寺大学)・江利川 春雄 (和歌山大学)

貴重な発表の機会を与えていただき誠にありがとうございました。発表者らは、ゆまに書房から2020・21年に広島版『英語教育』の全巻を復刻し、内容の本格的な研究に着手しました。発表では、刊行の経緯と英語教育史的意義、編集・発行を担った英語教育研究所の開設経緯、計量的調査による雑誌の全体像について報告したほか、英語教育分野での主要な論考の内容を考察しました。当時の広島文理大・高師の研究水準の高さに改めて感嘆するとともに、これらの貴重な遺産を今後活用していただければと願っております。

質疑応答では、貴重な情報や新たな研究の視点をお示しいただきました。竹中龍範先生からは、『英語教育』の後継誌である *ENGLISH* および *Urn* に関する論考をお送りいただきました。感謝申し上げますとともに、今後の研究に活かしていきたいと思っております。また、コロナ禍が一段落しましたら、ぜひ懇親会を復活させ、交流の機会を増やしていただければと願っております。

なお、『英語教育』の復刻・調査に際しては、江利川所蔵本の欠号を故・松村幹男先生の旧蔵書で補いました。ご尽力を賜った馬本勉先生および松村先生のご遺族にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

日本英語教育史学会第37回全国大会 (大阪大会) ぜひご参加ください

第37回全国大会 (大阪大会) は、下記の通り、オンラインで開催いたします。記念講演、研究発表に加え、「参加型シンポジウム」を新たに企画しております。皆様どうぞ奮ってご参加ください。オンラインでお目にかかれますことを楽しみにしております。

期 日：2021年5月15日 (土)・16日 (日) ※両日とも12:30受付開始

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

参加費：無 料

◆ 参加方法

学会ウェブサイト (<http://hiset.jp/>) から、**5月10日(月)までにお申込みください**。ご参加の皆様には、Zoom ミーティングの ID とパスコードを5月13日(木)に事務局よりお知らせいたします。

◆ プログラム

詳細につきましては、学会ウェブサイトをご覧ください。

◆ お問い合わせ

下記のメールアドレスまで、お気軽にご連絡ください。

大会実行委員会 taikai@hiset.jp

連載：日本英語教育史学会「会報」300号の歩み(2)

いつの間にか当たり前になってしまったこと

河村 和也

歴史に関わる学会としてはいささか恥ずかしいことなのですが、事務局では『会報』とその前身である『ニュース』や『月報』を保存していません。馬本先生・若有先生が編集を担当された分はすべてPDF化されていますが、わたしが関わっていた頃についてはパソコンや記憶媒体の更新などもあったため残念ながら完全とは言えないのです。

わたしが事務局をお預かりするようになったのは2008(平成20)年5月のことですが、その際にも『月報』を綴じたファイルといったものは引き継がれませんでした。紀要とは異なり『会報』のような出版物は速報性こそが重視されますから、もともと保存することを前提としていなかったのかも知れません。それでも、できることであれば、創刊以来のすべての号をアーカイブ化してみたいと思います。会員のみなさんの中には、紙媒体のみで発行していた頃からきちんと保存しているという方もきっとおいででしょう。これらをお借りして、スキャナにかけ電子的に保存するのです。手間と価値とを天秤にかければ、個人的には後者に断然の重みを感じてしまいます。

* * *

さて、本稿の表題は「いつの間にか当たり前になってしまったこと」としました。わたしが『月報』の編集を担当していた頃を振り返り、2つのことを書き残しておきたいと思います。

(1) 題字のこと

まず、題字が現在のようなデザインになったのは2004(平成16)年6月に発行された第181号です。この号には以下のようにあります。

長い間親しまれてきた「日本英語教育史学会月報」の表題ですが、著作権等の問題が発生する恐れもあるため、新体制の発足にあわせ刷新しました。

この「表題」とは、前回の江利川先生の稿で「古い拓本の文字を貼りあわせた『日本英語教育史学会月報』という渋いロゴ」と紹介されていたもので、音在先生の手になるものでした(下図)。



当初はこれをコピーし、版下の題字の部分に糊で貼り付けた上で印刷していたようです。しばらくするうちにこの方法は取られなくなり、題字もパソコンのフォントになったと記憶していますが、わたしが担当するようになったときにスキャニングデータを用いてこの題字を復活させました。

ところがあるとき、音在先生ご自身がこの題字を変えることを進言されたのです。著作権に触れる恐れがあるとのことでした。愛着をお持ちであったであろうデザインを手放そうとされるのですから、相当のご覚悟であったと思います。これを尊重しないわけにはいきませんでした。ちょうど小篠先生が会長となられ新たな体制に移行するときでしたので、思い切って大幅にデザインを変えてみた次第です。

(2) 写真のこと

現在では会報に写真が掲載されるのはごく当然のこととされています。研究例会がオンラインで開催されるようになり発表中の様子は掲載されなくなりましたが、対面で開催されていた頃には「発表者を撮り忘れた」とカメラマンが慌てることもしばしばでした。写真がなければ紙面が締まらないと誰もが思うようになってしまったのでしょうか。

写真が『月報』に初めて掲載されたのは2003(平成15)年1月に発行された第169号でした。香川大学で開催の第19回全国大会を告知する号でしたが、裏話を披露すれば、紙幅に妙な余裕が生まれてしまったため、大学のウェブサイトから拝借した写真を貼り付けてしのいだというのが本場のところでした。

写真の効果をはっきりと意識したのは題字を刷新した第181号で、拓殖大学で開催された第20回大会を振り返る記事と、その際に会場となった建物を紹介する記事で用いました。その後、2004(平成16)年10月の第184号では、研究例会の様子が初めて紙面に登場しています。

* * *

表題の「なってしまった」という部分には『会報』の編集に当たり前のことなどないのだという思いを込めました。例えば、わたしたちの『会報』は、発表への感想の部分だけはどのようなわけか2段に組んでいます。これは果たして「当たり前」のことなのでしょうか。わたし自身も手を付けなかった点ではあるのですが、編集の手間を考えると、あらためてもよいのではないかと思っています。題字についても、写真についても、その他のことについても、どれも決められたことなどとは思わず、のびやかに、常に新たな発想で紙面を充実させていただければと願っています。

(つづく)

>> 事務局より

>> 2020年度第3回定例理事会を開催

第282回研究例会に先立ち、2020年3月20日(土)9時30分よりZoomを用いてオンラインによる理事会が開催され、以下の件が話し合われました。

1. 次期役員体制について

→すべての理事会構成員は5月の全国大会の際に開催される総会をもって任期満了となり、同総会において選出される新会長により新たに副会長および理事が委嘱されることを確認しました。

2. 第37回全国大会（大阪大会）について

→実行委員長の提案を受け、運営の詳細およびプログラムを確定しました（詳細は別紙）。

3. 2020年度会計について

→事務局より中間報告をしました。年度末処理ののち、会計監査を経て5月の会員総会で最終的な報告をします。

4. 紀要について

→編集委員会より進捗状況について報告を受けました。例年通り5月に刊行の予定です。

5. その他

→新年度の研究例会について：

例年通り、奇数月の第3土曜日に開催することを確認しました。なお、2022年1月は第2土曜日である1月8日の開催となります。新型コロナウイルスの感染拡大状況に鑑み、2021年7月まではオンラインによる開催を確定。9月以降についてはあらためて理事会で検討することとしました。

》 名簿原票の返送について

会員台帳の情報を更新するため、4月中旬をめどに、すべての会員のみなさまに「名簿原票」を郵送します。電子版会報の受け取りにご協力くださっているみなさまにもお送りしますので、必ず開封のうえご確認ください。お忙しい時期にお手を煩わせることとなり恐縮ですが、よろしくご協力ください。

なお、会費の未納分がある方には「会費納入のお願い」もしくは「会員継続のご案内」を同封させていただきます。会計処理の不手際により、事務局からのお願いが遅れたみなさまには、この場をお借りしてお詫び申し上げます。引き続きのご協力をお願い申し上げます。

》 今年度の紀要と会費について

今年度の紀要は、全国大会終了後に事務局より「スマートレター」で発送します。その際、新年度分の「会費納入のお願い」を同封しますので、よろしくご協力ください。なお、昨年度（2020年度）までの会費が未納の方には紀要はお送りせず「会費納入のお願い」のみを郵送します。

昨年度より会員名簿は発行していませんが、ご希望の方には簡易製本によるものをお送りしますので、「名簿原票」確認の際にお申し付けください。

紀要に論考が掲載された方には抜刷をお送りします。今年度より印刷会社に発送を依頼しますが、紀要の本冊よりも早く届くものと思われるのでご承知おきください。

(文責：事務局)

>> 新入会員

- ◆ 小林 大介 (こばやし だいすけ) 静岡県 静岡市立高等学校

>> 英語教育史フォルダ

- ◆ 辻伸幸・上野舞斗・青田庄真・川口勇作・磯辺ゆかり編 『英語教育の歴史に学び・現在を問い・未来を拓く：江利川春雄教授退職記念論集』 溪水社, 2021年3月刊, 4,180円。
英語教育史7篇, 英語教育政策9篇, 英語授業学7篇, エッセイ・創作5篇の合計28篇の論考を含む。オンデマンド出版で, Amazon, 楽天ブックス, 三省堂書店から購入できる。

>> この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第37回全国大会 2021年5月15・16日(土・日) オンラインで開催予定
- ◆ 第283回研究例会 2021年7月17日(土) オンラインで開催予定
- ◆ 第284回研究例会 2021年9月18日(土) 未定
- ◆ 第285回研究例会 2021年11月20日(土) 未定
- ◆ 第286回研究例会 2022年1月8日(土) 未定
- ◆ 第287回研究例会 2022年3月19日(土) 未定

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要(100～200字程度)、(4) 使用予定機器、以上の4点を明記の上、発表希望月の3ヶ月前の10日(9月発表希望であれば6月10日)までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

EDITOR'S BOX 新年度が始まりました。昨年度と同様にオンラインでのスタートになりましたが、秋田大学では一部対面での授業も行なわれます。／秋田県は2月の初旬から3月中旬まで感染者が一人もいない状況が続いていたのですが、そこから少しずつ感染者が出てきて、緊張感が高まっています。／大学での授業の座席も先週まで1メートル間隔だったのが、今週から2メートル間隔に変更になっています。／コロナの問題が起こってから1年以上が経ちましたが、日本ではワクチンの接種も進んでいない上、変異株も流行するようになって、状況が改善している実感がありません。「ここまで我慢すれば・・・」というゴールのない生活が続くのは精神的にもつらいと感じるこの頃です。／本号の河村先生の最後のメッセージは、私にとってとても有難いものでした。これまでの会報編集担当はどなたも仕事のできる方ばかりだったこともあって、何かを変えるという発想は私には全くなかったからです。／会報編集の仕事も(近いか遠いかはわかりませんが)将来的にはどなたかに引き継いでいただくことになること、また新体制に切り替わることもふまえて、これを機に次号から感想の部分も2段組を廃し、他と同様にしたいと思います。また題字についてもどういったものにしたらよいか検討を行ってみたいと思います。(若)